

生き生きと自分を表現する力を育むために
～共主体保育を目指して～

発 表 者 前田 あゆみ (小さき花園幼稚園)
指導助言者 星見 志暢 (鳥取県教育委員会
事務局東部教育局幼児教育センター指導主事)
司 会 者 水中 淳子 (小さき花園幼稚園)
記 録 者 坂手 愛理 (小さき花園幼稚園)
森本 みらい (小さき花園幼稚園)

1、発表の概要

(1) 主題設定の理由

今回、研究の機会をいただき、本園の抱える課題について園内研修を行った。「私たちは、どんな子どもを育てようとしているのか」「本園の子どもたちの長所、短所は…」「一斉保育が多いのではないか」「保育者主導で、子どもの声を十分に聞き出せているのか」という振り返りがあった。子どもたちの特徴として「受け身な子が多い」「自分で考えることが苦手」「失敗を恐れて挑戦できない」など、試行錯誤したり、挑戦したりする中で自己発揮をし、様々な葛藤体験を乗り越え、満足感や達成感を味わうことが更に必要ではないか、という課題も出た。全職員が自園の理念・方針を理解し、「生き生きと自分を表現する力を育むために～共主体保育を目指して～」研究を進めることにした。

(2) 取り組みについて

- エピソード記録を持ち寄って、園内研修で幼児理解を深める。
- ドキュメンテーションを作成し園内研修で幼児理解を深めると共に、保護者や地域に発信していく。
- 保育者が先回りして教えない、あくまでも子どもの表現に寄り添っていくこと。両者（子どもと保育者）の思いが園内で同時進行して歩み進んでいく『共主体』保育をめざしていく。

(3) 実践例

●エピソード記録①「ダンゴムシ、大好き」3歳児

初めての園生活にも少しずつ慣れてきた3歳児。5月後半、年長・中児がダンゴムシを探している様子を見て興味はあるが、自分で触るのは怖い様子であった。毎日遊ぶうちに自分達で探すようになり、どんな所に多くいるか分かるようになってきた。また、少しずつ触れられるようになり、年長・中児の真似をし、カップを持って仲間同士でダンゴムシ探しに没頭していた。反面、捕まえる際の力加減がわからず、強く握ってしまい、丸まっているダンゴムシに「動いて」と力を加え、死んでしまい「先生、動かないよ？」と発言する子どももいた。その後も子どもたちの興味は持続し、絵本や図鑑などを読んで、ダンゴムシとワラジムシとの違いやオスとメスの違いが分かるようになったり、脱皮をした殻や赤ちゃんがいるダンゴムシも見つけるようになった。また、「飼ってみたい」と声が上がり虫かごに集めると、毎日部屋で観察し、虫かごの中でお母さんダンゴムシから赤ちゃんが生まれる等、日に日に興味が深まっていった。そこで、保育者がダンゴムシの衣装を作ると、「アリさんが来たぞ!」「みんな丸まって!」と変身したり、水や石を食べる姿を真似したりとなりきって遊ぶ姿が見られた。また、ダンゴムシのダンスをみんなで踊るなど、活動がどんどん広がり、参観では、保護者の方に子ども達が今興味を持っている姿を見てもらった。

●エピソード記録②「大きな木、ありがとう」5歳児

園の外構修繕工事に伴い、正門に並ぶ巨木を切り倒すことになった。創立当初から生きてきた巨木を伐採することを、子ども達にどのように伝えるべきか職員で話し合った。まず、これから園が大きく変わることを話し、その為に「大きな木」を伐採する必要があることを説明した。すると「かわい

そうだなあ」5歳児から伐採を惜しむ声が上がった。この出来事を子ども達の気持ちを大切にしながらも受け入れ、次のステージへ行けるよう配慮した。子ども達の木への思いを違う形にして、心に残るものに出来ないかと考え、子どものメッセージを歌にし、感謝を込めて木へプレゼントすることになった。そして、子ども達から出た言葉に音をつけ、1曲の歌が完成した。そして、小さいクラスにも歌を覚えてもらおうと、各クラスを歌って回り、木を伐採することを伝えると共に、幼いながらもこの出来事に関心を注ぎ、感謝してその日を迎えられるようにした。5歳児が歌う曲に小さい子ども達も関心を示し、いつしか園全体の歌となり、園内でこの歌が口ずさまれ聞こえるまでとなった。そして、木への「感謝の集い」を行うことにし、保護者にも呼びかけ、子ども達と一緒に「大きな木」を見上げながら、みんなで作った歌をプレゼントした。集まった保護者へ、5歳児が抱いた木への思いを歌詞カードにして渡し、この日までの園での様子を伝えた。最後は園児・保護者・職員、全員で大きな木を見上げながら感謝の気持ちを持って歌った。数日後、木は全て伐採された。しかし、子ども達の心に大きな木がしっかり思い出となって残っているのを実感した。それからしばらくの間、「大きな木」の歌は、園内で歌われ子ども達の思い出となった。

●ドキュメンテーション 竹馬に挑戦！① 5歳児5月

体力づくりの一環として始まった竹馬。今年で3年目。今年度の5歳児も挑戦する事になった。普段から飽きっぽく、粘り強さに欠ける面が気になる子ども達。積極的に体を動かす遊びをしない子どもや、姿勢が悪く椅子にまっすぐ座れない子どもが多いと感じていた。始めた頃は「倒れそう、怖い」「足が痛い、難しい、できない」など諦めたり、違う遊びをしたくなる子どもが見られた。そんな中で保育者に励まされながら挑戦していった。一日の中に一齐に竹馬に取り組む時間を設定していたが、自由遊びの時間もやりたいと言う子どもが出てくるようになり、自主的に練習する子どもが増えてきた。その中で、友だちに「どうやったらいいの？」と助けを求め、「ここを持ったらいいよ」などとアドバイスをする姿が見られるようになった。そのように過ごす中で、乗れるようになる子どもが出てきた。「すごいな」「僕も早くのりたい」などと友だちの様子が気になり、前向きな姿勢が少しずつ見られるようになってきた。

●ドキュメンテーション竹馬に挑戦！② 5歳児6月

毎日コツコツと取り組んできた子ども達。練習も1ヶ月続くと乗れる子どもが増え、みんなで喜び合った。低い所から始め、上達し高いものに挑戦する子どもも増え、バスの運転手さんが毎日微妙な調整をして子ども達の頑張りを支えてくれている。また、乗れる子どもがまだ乗れない子にアドバイスをしたり、支えて一緒に歩いたり、教え合い助け合って取り組んでいた。上手くなった子どもは、足場が高くなり、自分たちでカラーブロックを使用して乗れるようになり、今では練習に欠かせない道具となった。

●ドキュメンテーション竹馬に挑戦！③ 5歳児7月

クラスの半分以上の子どもが乗れるようになってきた。その中で、ずっと乗れなかったT君が乗れるようになり、いつも一緒に遊んでいたT君が竹馬をし始めた事により、こちらを気にする様子が見られるようになった。E君のような竹馬に躊躇してしまう子どもの為に竹で作った竹ぼっくりを準備し、自由時間に出してみた。するとE君は、竹馬で遊ぶ輪の中に入り竹ぼっくりをし始めた。みんなと一緒に取り組む表情は嬉しそうに見えた。自分でやってみようという気持ちが見られた大きな一歩のように感じた。竹馬と竹ぼっくりを一緒に置き、自分で選べる選択肢を作ったことで、自分もできるものがある事に安心して遊びの輪に入る事ができたように思えた。また、リズムに乗り遊ぶのが好きなKちゃん(支援を必要とする子)には、竹馬に鈴を付けて音が鳴るように作りかえると、喜んで鈴を鳴らし足踏みをする姿が見られた。

(4) 反省と考察

●エピソード記録①・②について

- ①・子ども達が今どのようなことに興味や関心を向けているのか、遊びの何におもしろさを感じているのかを保育者が共感し、受け止めていくことが大切だと改めて感じた。3歳児にとって、虫探しは実際に飼ってみることで生死について考えたり、命の大切さを学ぶ機会となった。
 - ・衣装の色や他の虫になりたい子ども達はいなかったかなど、共主体という面から子どもの意見をもっと取り入れてもよかったと感じた。
- ②・先生や友だちと心通わせる中で、素直に感じたままを自由に言葉で表現したり、仲間の話にも興味を持って耳を傾けたりなど、言葉による伝え合いができる機会となった。また、子どもが「大きな木」を擬人化して、自然(木々)と捉え、次第に周囲の環境を人と同様に「いのち」として愛おしさを感じる姿が見られた。子どもが自然と関わることで、自分も生態系の一部と身体で感じ、それを大切にしていきたいと思える経験となった。
 - ・「大きな木ありがとうの集い」には、園児と教職員だけにとどまらず、保護者も取り込んで「人が繋がる」ことを願いながら保育した。

●竹馬に挑戦！①②③について

- ①・子どもたちに「やってほしい」「乗れるようになってほしい」という保育者の気持ちが前に出すぎてしまい、保育者主体になりすぎてしまったように感じた。
- ②・乗れない子・苦手な子にも「やってみようかな」と思える選択肢をはじめから準備し、自分自身で選ぶことで、主体的に取り組んでいけるのではなかったかと思った。
- ③・自分から興味を持って竹馬に取り組む中で、乗る為の方法を考え、試行錯誤し、達成感を味わえる経験となった。

(5) 今後の課題

- ・どの事例においても子ども達が自主的に取り組んだ活動での姿は、本園のめざす子ども像に繋がり、改めて共主体保育の大切さを感じたと共に、今後も保育者が子どもの興味に常にアンテナを張って、子どもが主体となって企画したことを中心に進めていく保育であることをめざしていきたい。
- ・結果でなく過程に着目し、一人ひとりの成長を認め、次の課題に繋げるように取り組んでいきたい。
- ・子どもがまず主であることを忘れず、子どもがどう感じていけるかを保育者は掴み、そこに保育者の願いを上乗せしていく、そうすることで共主体保育が実現するのではないかと感じた。
- ・今後も園内研修を行い、意見を出し合い、全職員で自園の理念について共通理解を深めていきたい。

2、研究討議

(1) 発表内容に対する質疑応答

- Q…共主体を目指そうと思った前と後で、一斉保育の時間の変化した部分や自由保育の時間をどのように工夫したのかについて知りたい。
- A…学び始めたばかりで手探りな点もあるが、「共主体」を学び変わった部分は、主人公は子どもであり、保育者が前に出すぎてはいけないことを実感した。活動の際には、前に子ども達と話し合いや相談をし、子ども達が主体となって前向きになれるような保育を進めていかなければと思った。

(2) 全体討議

【討議方法】 各園の保育の写真(エピソード)をもとに、自分自身でその写真の保育について「共主体」という視点からよかった点と少し欠けていたと思う点を振り返る。

●「稲を子どもたちと一緒に植えている様子」の写真について

自園給食で発芽玄米を提供。子ども達から「お米ってどうやってできるの？」と質問があり、説明や絵本を読むだけでなく、実際にバケツを使った稲栽培に挑戦してみた。最初は形ができていなかった

たので、「本当にお米ができるの？」と実感がなかったが、毎日の水やりを行う中で、少しずつ芽が成長していくのを見て「伸びてきたね」「大きくなったらお米になるんだよね！早く食べたいな」と成長を楽しみにする声があった。猛暑で稲が枯れ、蚊が繁殖しそうになる時もあったが、子ども達と「どうしたら稲が元気に育つか？」と話し合い、試行錯誤しながら稲栽培に取り組んでいる。良かった点は、他大葉なども育てており給食で好き嫌いする子どもも、その日に収穫したものが給食に出たことで「これなら食べられる」と、少しずつ食べる様子や、栽培経験で植物や自然に興味・関心が出てきた子の様子も見られた。改善点は、稲を植える時に汚れるのを気にして触りたくない子がいたので、やりたくなるような声かけや、泥に慣れるように砂場遊び、泥遊びを導入に取り入れても良かった。

3 指導助言（全体まとめ）

○めざす子どもの姿の共通理解

子どもの姿は指導の結果。その為、子どもの姿から自らの指導を振り返り、改善をすることが大事である。研究をスタートさせる上では、子どもの実態から全職員での共通理解といった部分が大切である。教育基本法第11条から幼児教育の質の向上が必要であり、その為に園内研修の充実、全職員のベクトルを揃えることが大切になる。研究テーマの立て方について、園内研究の計画は、子どもの実態把握から始まる。園の教育目標をもとにして、設定してあるめざす子ども像と実態とのずれ、そのずれを生じさせている原因が課題であり、この課題を克服、または良い所を更に伸ばしていく取り組みが研究である。そして目指すゴールをイメージさせるものが研究主題、研究テーマになる。また、研究テーマが決まったら、めざす子どもの姿について全職員で共有していくことが大切である。その上で研究の重点、研究内容等を決めていく。園内研修とは保育者同士で保育や保護者支援について意見交換や情報共有等を通して、保育の質を向上させるもので、園内研修を通して保育を見直すと共にチーム力、組織力を向上させることができる。またお互いの考えを知ること、より良い保育に繋がる。必ず実践の途中や、年度末に研究の成果について振り返ることが大切になる。また、研修計画を立てる際には研究主題、研究テーマに掛かる研修とその他の研修に分けて立てることが大切である。

○幼児理解を深めるために

幼児を理解するとは、一人ひとりの幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解し、かつ受け止め、その幼児の良さや可能性などを理解しようとすることである。その為、幼児を理解することが保育の出発地点となり、そこから一人ひとりの子どもの発達、育ちを着実に促す保育が生み出されていく。つまり、幼児理解なしでは子どもの育ちを着実に促すことはできない。遊びは幼児期にふさわしい学び、保育の専門家は遊びの中にどんな学びがあるのか、どんな環境構成や援助の工夫があるのかを読み取ることがとても大切になる。しかし、保育は見えにくいものなので、保育を振り返って子どもの育ちや学びを確認し、記録して省察していくことが大切である。そうすることで幼児理解を深め、指導の改善に活かすことができる。記録を多様な視点で振り返り、保育について話し合っていくことを通して、教師間の共通理解や協力体制を築くことができる。更に保育の質の向上を図り、教師としての専門性を高めていく機会とすることができる。

○共主体保育の展開

共主体保育とは新しい言葉ではあるが特別な事ではなくて、これまで幼児教育で大切にしてきたことである。幼稚園教育要領解説第1章にある通り、子ども主体が基本であり、幼児が効率よく活動をこなすことが保育の目的ではない。幼児が自ら環境に働きかけて、試行錯誤しながら時には失敗もすることで、自らの発達に必要な力を身に付けていく。子ども主体が基本だが、幼児をただ遊ばせているだけでは教育・保育は成り立たない。教師は子どもの道筋を見通して教育的に価値のある環境を計画的に構成することが大切になる。環境を通して行う教育は幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つもので、幼児が教師の援助の下で主体性を発揮して、活動を展開していくことができるよう、教師は活動の主体が幼児であるということを常に意識しながら活動が生まれやすいように、展開しやすいように、意図をもって環境を構成していく。教師は幼児が主体的に活動を行い、

発達に必要な関係を結んでいくことができるような状況を作ること、そして幼児の活動の流れに即して、幼児が実現したいことを捉え環境を再構成していく。また幼稚園教育要領には教師の役割として幼児との共同作業、幼児と共鳴するものということも示されており、共主体という言葉はOECDが示した学びの羅針盤ラーニングコンパスで示された言葉が由来で、これからの社会が目指していくモデルである。個人や社会のwell-beingの実現を目指し、この中心概念をエイジェンシー（主体性）であるとしている。エイジェンシーだけでなくこれからは、コ・エイジェンシー（共主体）、一人の主体性だけではなく一緒に生活しているみんなが主体性を発揮することが大切だと示されている。教師の良さ、子どもの良さを共に出し合って教師と子どもが共同して保育をつくっていくことである。子どもの主体性に任せるだけではなく、教師自身が関心を持っていること、子どもに出会わせたいと思うことを積極的に投げかけることである。子どもに対して先生側が刺激や提案をすることで遊びがもっと豊かになる。また一人のやってみたい、一人の主体性だけではなくてクラスの友達みんなで共同しながら遊ぶということも共主体である。例えば、集まりの時間で自分の遊びについてみんなに伝えて意見を言い合いながら一緒に展開していく遊びも共主体に繋がる。更には保護者、自然を主体とした保育の展開も共主体の考え方である。子ども主体の共主体の保育というのはこの子達にとって何がベストなのか、子どもの最善の利益を考えて行うものだということを示している方もある。環境に教師の願いを込めて見守ることも共主体。また遊びが停滞している時にヒントを出すことも共主体の考え方である。研究を園全体で共通理解し、推進することで尊重し合える職員集団に繋がり、子どもの育ちに繋がっていく。

～記録写真～

